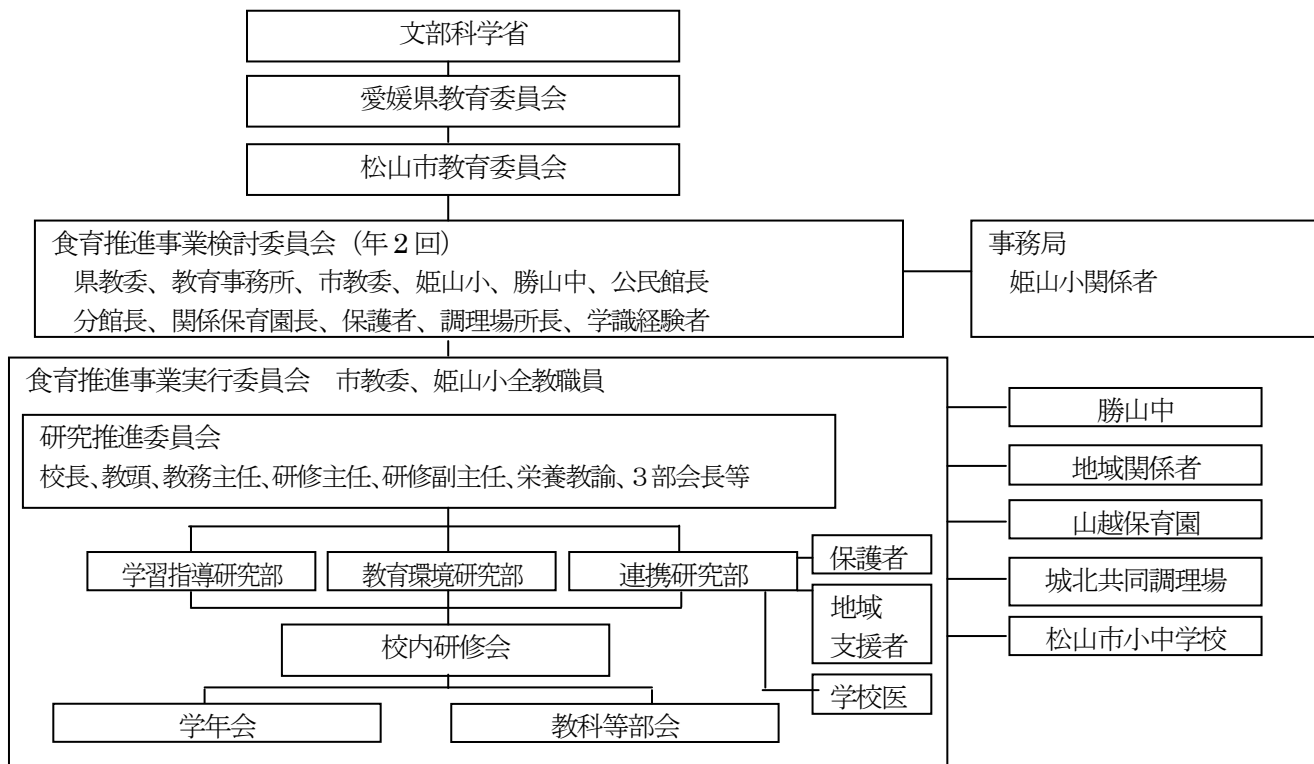


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	愛媛県
推進地域名	松山市

1. 事業推進の体制



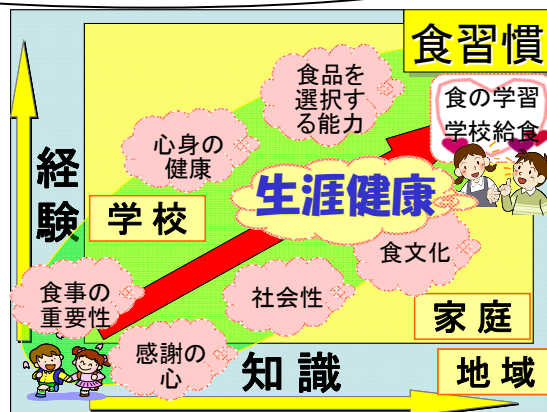
テーマ1 各教科等における食に関する指導の充実のための取組

教科等の指導内容を発達段階を踏まえて系統付け、学校生活全体を通して、子ども自身の「楽しい・おいしい体験」を繰り返すことで、子どもの基本的な生活習慣が見直され、「生涯健康な生活を送る基礎づくり」ができると考え、取り組んだ。



1 学習対象や自己、他者、環境、文化とよりよくかかわっていく学習の工夫

平成19年度、発達段階を踏まえ、系統を意識して学年別の食に関する指導の目標と育てたい子どもの姿を考え、教職員の共通理解を図った。6年間の楽しいおいしい体験を通して、食事の重要性や感謝の心が育ただけでなく、食文化を知り、やる気や意欲をもって、自ら周りの人や地域とかわり、一年一年身に付けていく食の知識や経験を基に、心身の健康の保持増進をしていこうとする力を身に付けてほしいと考え、取り組んだ。食に関する指導の全体計画及び各学年の年間指導計画を見直し、学年内での各教科・総合的な学習の時間・道徳・特別活動の有機的な関連を考え、各単元の学習がより体験的な活動としてつながっていくようにした。各学年での学習と生きた教材としての給食の時間を軸としながら、食の学習を深めていきたいと授業改善に努めた。



各単元の学習がより体験的な活動としてつながっていくようにした。各学年での学習と生きた教材としての給食の時間を軸としながら、食の学習を深めていきたいと授業改善に努めた。

【実践例】3年 学級活動「わたしの朝ごはん」9月

本時の目標 ○ 朝食の大切さを知り、よりよい朝食の取り方を実践しようとする態度を育てる。

子どもたちは、1年生の学級活動「おべんとうをしらべてみよう」で3つの食品グループがあることを知り、2年生の学級活動「朝ごはん食べたかな？」で朝食の献立を3つの食品グループに分け、3つがそろうことが大事なことが分かった。また、1学期の保健「毎日の生活と健康」の学習では、体の調子や気分には、毎日の朝食が関係していることを学習した。しかし、子どもたちの朝食の様子を見ると、食べていない子どもはいないものの、主食・主菜・副菜のバランスのとれた朝食をとっている子どもは少ない。本時は、緑のグループに着目させ、野菜をとることの大切さを知り、3つの食品グループをバランスよく食べようとする態度を育てることをねらいとして、朝食の大切さについて話し合い、内容を考えていく学習を進めた。教師の食べた朝食を見て話し合った後、栄養教諭が専門的な立場からよりよい朝食にするための3つのポイントについて話した。その話をもとに、提示した教師の朝食をグループでバランスのとれたものに修正し、発表した。学習のまとめとして、自分の食べた朝食も見直し、3色の食品グループのバランスがとれたものに修正した。学習後、ワークシートを持ち帰り、家庭でも朝食について話し合う機会を設け、チャレンジカードを活用しながらよりよい朝食を食べようとする意識を高めた。栄養教諭は専門的な知識と技能をもっており、学級担任と共に食に関する学習をつくっていったことで、子どもたちにとって確かで豊かな学びにつながった(図1)。



《図1 栄養教諭との連携》

【実践例】2年 生活科「おいもさん、ばんざい」11月

本時の目標 ○ 収穫の喜びを感じながら、ふかしいも作り楽しく取り組もうとしている。

○ ふかしいも作りを通して、サツマイモへの自分の思いやサツマイモを味わう喜びに気付く。

子どもたちは、地域の野菜作り名人に教えてもらいながら、1学期に夏野菜の栽培活動に取り組んだ。継続的に水やりなどの世話をし、夏休み前に収穫を迎えることができた。継続的に親身になって野菜を世話すれば、収穫という形になって喜びを味わうことができることを子どもたちは学ぶことができた。また、「チャレンジカード」では、多くの子どもが保護者と一緒に夏野菜を使った料理に挑戦し、自分が育てた野菜をおいしく食べようとする意識が高いことが分かった。

夏野菜と並行して、サツマイモ作りを行った。11月に収穫し、本時では、収穫したサツマイモで遊んだ後に「サツマイモを食べたい」という子どもの思いや願いを生かし、ふかしいもを作った。ふかしいもは、2年生の子どもが簡単に調理でき、サツマイモ本来の味を味わうことができる調理である。調理の際には保護者の協力も得て、安全面や衛生面に気を付けた。地域の野菜作り名人を招待し、感謝の気持ちを表した。また、保護者にその他のサツマイモ料理を紹介してもらい、子どもたちは家庭でサツマイモ料理に挑戦しようという意欲をもった。作ったサツマイモ料理を「チャレンジカード」に記入して情報交換し、あらためて、サツマイモに命があることや料理を作ってくれる人への感謝の気持ちに気付くことができた。



《図2 保護者や地域の人と共に》

2 教育環境の整備と充実

(1) 健康についての関心・意欲を高める活動

ア 豊かなかかわりを育む集会活動

食についての関心・意欲を高める活動として、1学期に一回ずつ「三色ぱっくんもりもり集会」という全校集会を行った。

今年度は、サブテーマを「おいしい愛媛」とし、愛媛の食について考える機会とした。4、5、6年生の代表者による「三色さんファミリー」と給食委員会の「姫山栄養レンジャー」による進行のもと、1学期は2年生が夏野菜、4年生が大豆についての学習を発表する集会を行った(図3)。2学期は、新型インフルエンザの流行のため、集会形式では行えず、テレビ放送で1、3、6年の発表を行った。3学期は、「三色ぱっくんウォークラリー」と



《図3 4年生の発表の様子》

して、各学年のスペースに食に関するさまざまな問題コーナーを設定した。子どもたちは、縦割りグループで校内を回りながら、意欲的に問題に取り組んだ。

毎年、姫山小学校の誕生を記念して船の国集會が行われる。今年度は、「食」をテーマにして集會が行われた。赤、黄、青の縦割りグループで「赤の食べ物」「黄の食べ物」「緑の食べ物」をテーマに、遊びの中で食にふれ合えるコーナーづくりを行った。子どもたちは、日ごろの食の学習を生かし、幅広いコーナー作りができた。

イ 校内放送の活用

1学期は南予、2学期は中予、3学期は東予を中心にした、食に関する情報を子どもたちに伝えるための校内放送番組を計画し、制作した。1学期は、南予、特に、給食のカツオの献立に関連して、愛南町のおいしい食べ物を紹介した。2学期は松山市、3学期は今治市の特産品や郷土料理を紹介し、子どもたちが愛媛の特産品や郷土料理に親しみを持ち、愛媛の食についての理解を深めることができた。また、毎日の給食の時間に、全国の郷土料理や行事食、マナーなどについてのテレビ放送をしている。

ウ イメージキャラクター姫山栄養レンジャー

給食委員会の子どもたちが「姫山栄養レンジャー」に扮し、食に関する学習のイメージキャラクターとして集會や校内放送で活躍してきた。今年度は、愛媛の特産品を紹介するキャラクターとして、新たに「みかんマン」を登場させた。「みかんマン」や「姫山栄養レンジャー」などのキャラクターを登場させたことで、子どもたちが食に親しみを持ち、食についての理解を深めることができた(図5)。



《図4 姫山栄養レンジャー》



《図5 みかんマン》

(2) 多目的空間を生かした学習環境づくり

オープンスペースの広い空間を生かした、学年ごとの広い掲示場所は、学習過程に沿った資料を掲示することができる。写真や子どもが記録したもの、主な学習内容を掲示していくことは、子どもが見通しをもって次の活動をしたり、振り返りながら次の活動を考えていったりするのに役立っている。

テーマ2 学校と家庭・地域との連携による食に関する指導の充実のための取組

1 子ども、保護者の実態調査の実施と活用

子どもと保護者のアンケートを実施し、集計、分析したことで、家庭や子どもたちの実態を把握することができ、課題をもとに実践を進めた。

2 生活のリズム向上のための普及啓発活動

(1) 食育だよりの発行

食育だより、給食だより、保健だよりの発行、朝食レシピの募集・紹介等、家庭・地域との連携を投げかけていく中で、学校と家庭・地域との意識の交流が図られる機会が増えてきた。

(2) 食育参観日

保護者の食育への関心を高め、理解を深めていただくために食に関する学習を参観日で公開した。



《図6 親子料理教室》

(3) 親子料理教室

朝食にあまり野菜が食べられていないという実態から、1、2、3年生の親子対象に、6月に親子料理教室を実施した。料理教室の先生から、簡単で野菜を多く摂ることができる料理を教わった（図6）。

(4) 食に関する指導の授業実践における地域の人材の活用

各学年での野菜栽培について地域の人に指導していただきながら野菜を収穫し、その野菜を使った学習や調理をしている。2年生や4年生では、保護者の方々に調理のお手伝いをしていただき、作って食べる喜びを体験し、3年生や6年生では、総合的な学習の時間で地域の方に講師になっていただきながら昔の食生活について学習し、食を考えていく機会をつくった。5年生は、地域の人にお世話になり、米作り体験をした（図7）。



《図7 5年生の米作り体験》

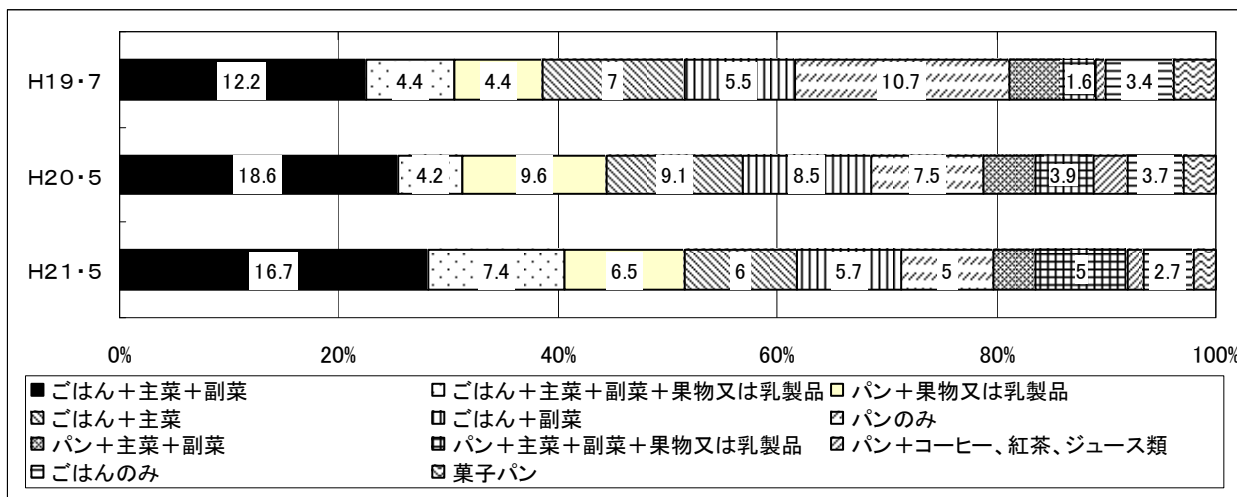
テーマ1～2に共通する事業実施の結果

1 アンケート集計により見えてきた傾向

全体としては就寝時刻・起床時刻がやや早くなり、睡眠時間もやや長くなっている。しかし、学年別の変容を見ると、学年が上がるにつれて就寝時刻が遅くなる傾向があり、高学年では睡眠時間もやや少なくなっている。朝食を毎朝とる子どもは約9割と高い割合で、徐々に毎日とる方向へ進んでいる。また、朝食の内容についても、単品からいくつかの種類の組み合わせへと変わってきている。しかし、野菜をとる量は、あまり増えていない。体調不良を訴える子どもは減少傾向にある。

保護者と子どもの間で、食について話す機会は増えてきている。

<朝食の内容>



2 栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業研究発表会の実施

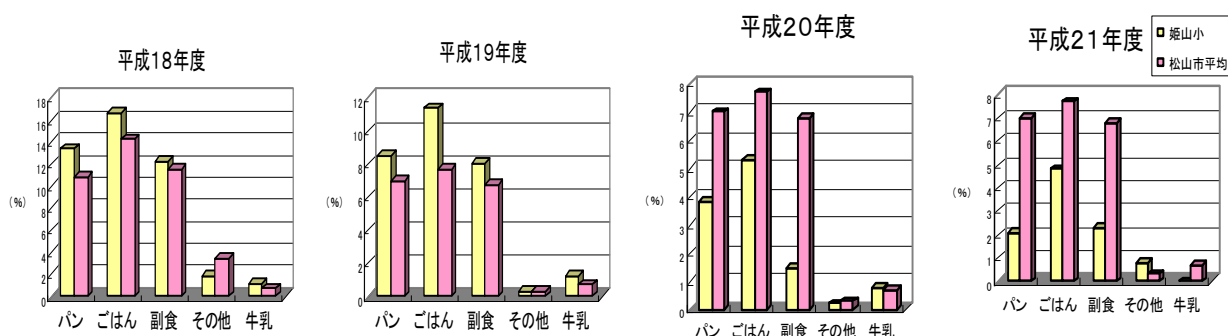
研究大会を実施し、松山市内だけでなく愛媛県内の学校給食実施校の教職員、学校給食共同調理場関係職員、保護者、食育関係者等に本校の取組を紹介し、食育推進の実践について協議することができた。

3 リーフレットでの啓発

本校の取組をリーフレットにまとめ、県下全小中学校に配布し、食育推進事業の取組を報告した。

数字で変化のあった事項について

給食の残菜量の変化 16.7% (H18年度6月) → 11.4% (H19年度6月) → 5.3% (H20年度6月) → 4.8% (H21年度6月) <給食残食調査週間のごはん残食率>



体調不良を感じる子ども (毎日がだるい) の変化

40.7% (H19年度7月) → 34.9% (H20年度5月) → 30.7% (H21年度5月)

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

3年間の事業実践で、各単元の学習がつながり、体験したことが上学年での学習においてもよりつながっていくようになってきている。

集会活動や放送番組による啓発活動等により、食について関心をもつきっかけとなった。子どもたちが主体的に取り組んだり、豊かにかかわり合ったりする活動の場や環境を工夫をして、食の学習の場が増えたことで、子どもたちが楽しみながら食にかかわろうとする意識が高まってきた。

子どもたちが「楽しい・おいしい」食の学習を繰り返し、学年便りや参観日等で、食に関する学習の内容を家庭に伝えていくことで、保護者も食への関心を今まで以上に持つようになり、家庭での実践が学習に生かされたり、学習したことが家庭での食体験の広がりにつながったりしてきた。また、家庭において保護者と子どもの間に食に関する話題が増えてきた。

平成19年度から継続して子どもと保護者のアンケートを実施し、集計、分析したことで、家庭や子どもたちの実態を把握することができ、課題をもとに実践を進めることができた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

各学年の学習がつながってきているので、今後も、さらによりよい活動を目指して、目の前の子どもの実態に即しながら年間計画を見直し、実践を継続していきたい。

保育園の子どもたちの小学校入学への期待感を高める機会となるよう昨年度実施した就学児童による給食参観は、今年度新型インフルエンザ流行のため、実施することができなかった。幼・保・小・中の連携については、十分ではなかった。今後さらに幼・保・小・中の交流を密にして、指導に関する共通理解を図り、さらにそれぞれの保護者への働きかけをしていくことが必要である。

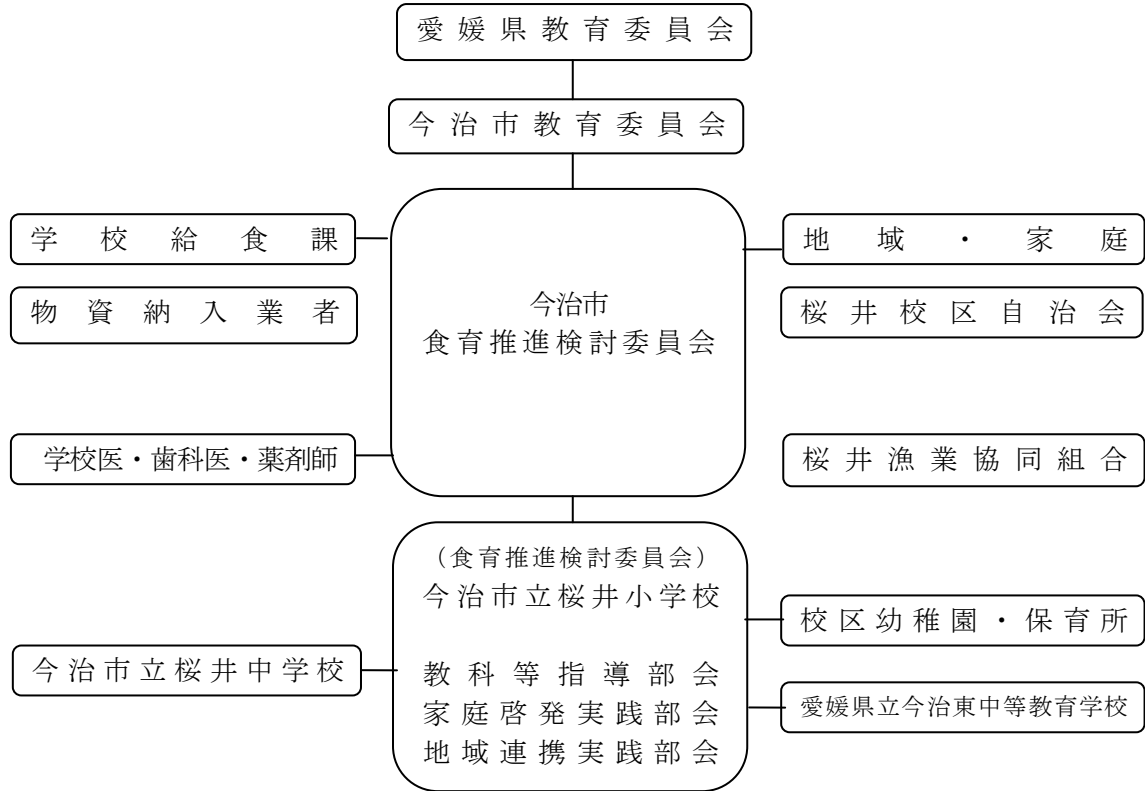
就寝時刻と起床時刻など、まだまだ生活習慣の乱れがある子どもたちも多い。保護者と連携しながら、生活習慣の見直しを図り、生涯健康な生活を送る基礎づくりにしていく必要がある。また、保護者全体への啓発活動は効果を上げているが、朝食をとらない子どももいるなど、個に応じた指導の必要性を感じる。子どもたちを通して少しずつでも改善されていくよう働きかけていきたい。

学校側からの一方通行的な情報発信の形にならず、家庭や地域との連携がより双方向に進められるよう、さらに連携の取り方を工夫し、効果的に進めていく必要がある。

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	愛媛県
推進地域名	今治市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科等における食に関する指導の充実の取り組み

- ① 栄養教諭を中核とした望ましい食習慣を身に付けさせるための授業の充実
 - ・ どのような課題を持って、どのように計画実施していくか全職員で話し合い、意識統一を図った。
- ② 年間指導計画の見直し（食に関する全体計画・給食年間指導計画・年間指導計画）
 - ・ 農協・漁協・関係諸団体とのかかわりを通したものの、幼・保・小・中・高との関連を意識して取り入れた。
- ③ 教科・教科等における栄養教諭とのT・Tの実践
 - ・ 教科、教科等においてどの単元のどの時間にどのような形でT・Tを行うか、話し合い、実施した。



6年 学級活動
「食生活を見直そう」



1年 学級活動
「すききらいをせず
にたべよう」

テーマ2

学校と家庭との連携による食に関する指導の充実についての取り組み

- ① レシピカード・食育だより・食育パンフを通じた家庭への啓発
- 子どもたちが、料理することや地域の食材に関心を持つことができるように「簡単度」と「地産度」を示した。保護者からのアイデアや学級PTAで取り組んだレシピも取り入れ、学校と家庭で作っていくものにした。
 - 学校での様々な取組を家庭に知らせるために、毎月、「食ですくすく桜井っ子」を発行した。学校からだけの発信にならないように家庭からの意見や情報を募集するコーナーを設け、情報交換の場となるよう心掛けた。
- ② 保護者参加型食育参観日の実施
- 2年：むし歯とおやつ…授業後、おやつすることに気をつけるようになり、成果が見られた。(保護者感想)
 - 6年：食生活を見直そう…野菜は苦手で避けてきたが、授業を受けて大切さがわかったようだ。(保護者感想)
- ③ 学級PTA
- 1年：食育クイズ
親子でクッキング
お箸で引っ越しゲーム
 - 3年：親子料理教室
ベジタブルバスケット
 - 6年：桜井の鯛料理に挑戦
- ④ よりよい食習慣を育成するための家庭との連携
- 給食試食会… 当日の給食の献立レシピを紹介してほしいという意見が多かった。理解を深めるよい機会だ。
 - 手作り弁当… 食に関する知識だけでなく実践力を身に付けさせるために、「手作り弁当の日」を学期に1回設定し、取り組ませた。様々な家庭環境・子どもの技能力の差を考慮して、五つのコースに分け、自分で目標を立て実践させた。
①つめる。②家族を作る。③1品自分だけで作る。④2品自分だけで作る。⑤全部自分で作る。
- 第1回目… 4月30日(6年生のみ実施)
- 児童：弁当を作るお母さんの大変さが分かった。味がとてもおいしくて、うれしかった。
- 家族：いつもは早朝の静かな台所で黙々と作っていたが、今日は二人で作ったので楽しかった。
- 支援…………… 2回目に向けて：「親子で手作り弁当に挑戦」を学級PTAで計画し、アドバイスを受けながら調理した。学級活動でも「食生活を見直そう」と「手作り弁当の日」を関連づけて授業を行った。
- 第2回目… 10月1日(5、6年生が実施)
- 児童：卵焼きに挑戦した。ちょっと破れたりしたけど、うまく作れてよかった。味もよかった。
- 家族：前夜に下ごしらえをするなど手際がよかった。親が卵焼きをするところを「へえーそうやってするんや。」とよく見に来ていた。そのかいがあった。
- ⑤ 食育講演会
- 10月4日(日)内田美智子先生に講演をしていただいた。「食卓から始まる生教育～子どもの生きる力になるもの～」(食べたこと、食べたものの記憶が、子どもたちがどう育ったかという記憶につながる。そして、次の世代へとリレーされる。食べることは生きること、生きることは食べることである。…抜粋)



お箸で引っ越し



ベジタブルゲーム



桜井の鯛料理



2回目の余裕の6年生

テーマ3

学校と地域との連携による食に関する指導の充実についての取り組み

- ① 農協・漁協、関係諸団体とのかかわりを通じた活動
- 1年：「見よう、聞こう、触れ合おう、牛乳が届くまで」
 - 2年：「野菜の苗を植えよう」
 - 4年：「ぼかしを作ろう」
 - 5年：「漁協関係者との触れ合おう」
「ヒラメのえさやり、車エビの放流」
 - 6年：「桜井の鯛料理に挑戦」



牛乳をしぼろう



桜井で獲れる魚

② ホームページの更新

- ・ 桜井小学校のホームページに「食育コーナー」を設けた。各学年の食に関する活動を紹介した。

③ 学校行事による地域への啓発活動の工夫

- ・ サギソウフェスティバル… 毎年恒例の夏休みの行事である。地域の人々が学校を訪れ、子どもたちと触れ合う。各学級での出し物の中には、食に関するものも多くあり、楽しみながら食を学んでいただくよい機会となった。
- ・ 秋季大運動会…………… 食に関する障害走を取り入れ、地域・保護者に啓発した。
- ・ 各校の文化祭・住民祭…… 各学年の取組を紹介した食育パネルを掲示し、啓発をした。

サギソウフェスティバル



運動会



中高一貫校でのパネル展示



④ 漆器を使って

- ・ 桜井地区には、伝統的工芸品の桜井漆器がある。地元漆器業者から寄付していただいた漆器のお椀を6年生が使った。熱湯を入れても外側まで熱が伝わりにくく、児童の手で持ちやすい。児童の一人は、「いつもの食器なら熱くて、縁をつまんでいたけど、お椀は熱くなかった。使うなら、お椀の方がいい。」と感想を言った。



漆器を使おう

⑤ 修学旅行でのテーブルマナー

- ・ 6年生は、一泊二日の修学旅行を行う。宿泊先のホテルで、ナイフとフォークの洋食に挑戦した。ホテルの方に指導していただいた後、それぞれの皿に料理をつぎ分け、いただいた。



テーブルマナーを体験して

⑥ 食育発表大会（平成21年11月11日）

- ・ 県下各地から食育に興味関心を持つ教職員、栄養教諭、栄養士、幼稚園・保育所関係者など多数の参加者に本校の研究の成果を発表した。内容は、午前中「感謝してもりもり食べよう集会」「ビデオによる授業公開」午後から1年生、3年生、5年生による公開授業を行い、食育シンポジウムを行った。



感謝してもりもり食べよう



授業公開 1・3・5年生



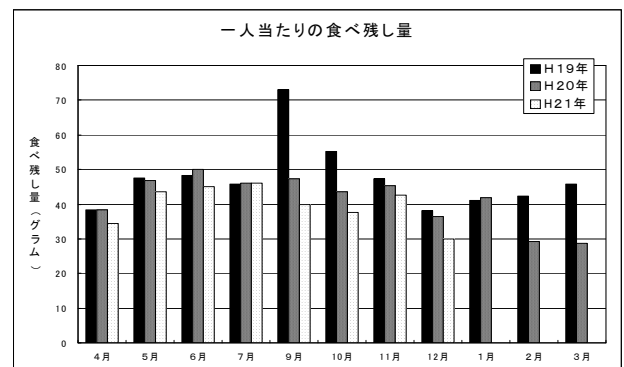
食育シンポジウム

テーマ1～3に共通する具体的計画

- 平成20年度の事業実施から見えた課題
 - ・ 食育に関して、積極的に取り組んでいる家庭とそうでない家庭に意識の差が大きい。すべての家庭で取り組むことができるような環境作りをする。
 - ・ 地産地消の意識が高まったが、「どこの、だれが、どのように」といった、生産者との交流の機会を増やす。
- アンケートの結果から見えてきた傾向
 - ・ 食材の栽培活動や食材とかかわる体験活動を充実させることによって、子どもの「食べよう」とする意識や意欲を高めることができる。
 - ・ 子どもを通して、家庭でも「地元のもの」を使った料理を積極的に作ろうとする家庭が増えた。望ましい食習慣の確立に向けて、家庭を変えることが少しずつでき始めている。

3. 数字で変化のあった事項について

- 朝ごはんを食べるようにしているか 96%→98%
- 好き嫌いをしないようにしているか 76%→79%
- 野菜をたくさん食べるようにしているか 82%→90%
- 食事の準備や片付けなどを行っているか 75%→80%
- 食事のあいさつは、きちんとしているか 86%→90%
- 学校給食は楽しいか 76%→87%
- 給食を全部、残さずに食べているか 41%→47%
- 給食の食材が地元産だと知っているか 60%→85%
- 地産地消の言葉を知っているか 18%→90%
- 郷土料理を家庭で食べるか 48%→78%



4. 事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 栄養教諭とのT・Tの授業を各学年が計画的に行うことができ、より専門的な知識を子どもたち、教師ともに得ることができた。また、給食をより身近に感じ、食材や栄養についての関心を高め、子どもたちはしっかり食べようとする態度を身に付けることができた。
- 食に関する年間指導計画を見直すことによって、発達段階に応じた学年の目標がより明確になるとともに、学年間のかかわりが把握でき、指導に見通しを持つことができた。
- フィールドワークなどで、子どもたちと調べ学習をすることによって、教師自身が、地域に関する貴重な知識を得たり、地域の人々とのつながりを強くしたりすることができ、感動を得た。
- いろいろな方法で家庭に「食」の大切さや子どもたちの食育活動を知っていただくことで、保護者の食育への関心が高まった。
- 農協や漁協とかかわることによって、学校だけでは経験できないような体験活動を子どもたちに提供することができ、教科・教科等における授業の充実を図ることができた。
- 農協や漁協と積極的にかかわることによって、自分たちの食にかかわる仕事をしている地元の人々を身近に感じ、尊敬や感謝の気持ちを持つことができた。
- 地域とかかわる行事で積極的に「食の大切さ」を啓発し、食への意識を高めることができた。

5. 今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 食育の取組を通じて、給食を食べようとする意識が高まり、残食が減りつつあるが、少ないとは言えない。今後も継続した残食指導が大切である。
- 学習したことがどのくらい身に付いているのか評価が難しい。
- 子どもたちに実践力を付けるために「手作り弁当の日」を実施した。家庭科の授業を充実させ、家庭環境に応じた無理のない実践を呼び掛けていかなければならない。
- 保護者からの意見や感想が反映されるような意見交換の場を工夫する必要がある。
- 体験活動や栽培活動を、今後も必要なものか、継続可能なものか判断し、指導内容を精選していく必要がある。